

初年次からはじめるウェルビーイング教育 —学生・大学・地域の豊かな未来のために 初年次教育はなにができるか?—

成田秀夫
桐蔭横浜大学

OECD が 2019 年に発表した「ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030 コンセプト・ノート」のなかで、これからの教育が目指すものとして「ウェルビーイング (well-being)」という考えが提唱された。そこではウェルビーイングとは「生徒が幸福で充実した人生を送るために必要な、心理的、認知的、社会的、身体的な働きと潜在能力」とされている。

しかし、ウェルビーイングという言葉は、既に、1946 年に署名された世界保健機関 (WHO; World Health Organization) 憲章の前文で「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう」と定義されている。

ウェルビーイング自体は最近生まれた考え方ではないが、現在になってそれが注目を集めているのは、多様化する生き方や価値観の変容が進む現代において、働くことや教育の目的が何であるかを再検討することが求められているからであろう。多様化する現代社会の中で、企業はいち早くウェルビーイングという考えを取り入れ、企業価値の創造と生産的な企業活動に取り組んでいる。企業活動の中でウェルビーイングを推進するようになったのは、従業員の心身の健康を実現するために労働時間の削減や多様な働き方を認める施策を進めることで、労働環境が改善されて従業員満足度が高まること、同時に従業員の心身の状態が満たされることで集中力が高まりミスが減り職場の生産性も高まることなどが知られるようになってきたからである。

今回のシンポジウムでは、溝上氏に、物質的・経済的豊かさを超えた個人化が進む現代社会においてウェルビーイングをどのように捉えるべきかについて、基本的な理解を深めるための提言をいただいた。それをふまえ、下向氏には、教育の中でウェルビーイングを実現するための土台となる Social Emotional Learning という考えについて、日本における先進的な取り組み事例を踏まえて報告いただき、さらに、山梨学院大学において、ウェルビーイング科目を構築し実践している宮本・深島両氏に具体的な授業での取り組みについて報告していただいた。併せて、青山学長には、そうした取り組みを進める前提となる山梨学院大学の基本姿勢について、冒頭で特別講演をいただいた。最後に、参加者とフロアーの意見交換を通して、初年次教育においてウェルビーイング教育をどのように推進していくのか議論を深めることができた。